

歴史

庵逄 由香 (立命館大学文学部准教授)



韓国史研究会 著

『新しい韓国史の手引き』(上・下、知識産業社、2008年)

한국사연구회 『새로운 한국사 길잡이』 상, 하, 지식산업사, 2008

本書は韓国史研究会の創立40周年を記念して出版された、韓国史(朝鮮史)研究入門書である。原始・古代、高麗、朝鮮、近代1(開港期)、近代2(植民地期)、現代の6つの時代区分ごとに、いくつかの細部項目(テーマ)を設定して、これまでの研究成果を総合的に盛り込みつつ、具体的に解説する形で研究史を整理している。韓国史研究会は1967年12月に創立された韓国でも古参の歴史学会で、これまで韓国史の研究入門書を2度出版している(『韓国史研究入門』第一版1981年、および第二版1987年)。本書はその「第三版」と位置づけられているが、各時代の項目と執筆者が新たに設定され、ほぼ全面的に書き直されているため、内容的には第二版の改訂版というより新刊と言った方がよいかもしれない。また、タイトルも内容も、一般読者を意識してより平易なものになっている。

総71項目にもなる各テーマは、時代ごとの企画委員が執筆者とともに仮選定し、企画委員会での議論と研究会の評議委員からの意見集約を経て決定されている。時代ごとの内容を細かく検討する能力は筆者にはないが、執筆陣を見る限り、各時代とも幅広い見識と研究経験を持つ50代前後の研究者が大半を占め、バランスのとれた解説をしている。また各時代の最初の項目は、その時代の性格規定にかかわるような総論的なテーマを配置し、各時代の大まかな流れをつかむことができるように配慮されている。本書の各時代の細部項目をざっと見るだけでも、ここ20年間の韓国史研究においてどのような問題関心が中心となってきたのかを概観することができる。

各時代の細部項目および執筆者は、以下の通りである(*は各時代の企画委員)。

原始・古代:「現代史学の流れ」(盧泰敦)、「韓国人の起源と形成」(李鮮馥)、「原始時代の展開と社会の複合化」(金壯錫)、「国家の形成」(余昊奎)、「政治体制」(朱甫暉)、「身分制と官等制」(河日植)、「生産と流通」(李賢惠)、「仏教信仰と思想」(金英美)、「韓国古代生活文化の再発見」(全虎兇)、「国際関係」(林起煥)、「渤海」(宋基豪)、「古代社会の解体」(*趙仁成)

高麗時代:「政治史の展開と高麗社会の性格論」(朴宗基)、「高麗の支配体制」(*李鎮漢)、「土地制度と経済生活」(金琪燮)、「高麗時代の身分制」(權寧國)、「家族と女性」(盧明鎬)、「仏教と儒教・風水圖識」(李炳熙)、「対外関係」(尹龍嫻)、「郷村社会と農民・賤民の抗争」(蔡雄錫)、「高麗時代の文化と科学技術」(具萬玉)、「高麗末の社会変動と王朝交代」(都賢喆)

朝鮮時代:「朝鮮社会の構造と性格」(金仁杰)、「法制と政治制度」(尹薰杓)、「政治勢力と政治運営」(金容欽)、「交流と戦争」(韓明基)、「農業生産力と農業経営」(金建泰)、「賦税制度と農民生活」(宋亮燮)、「商業と都市」(高東煥)、「地方社会」(高錫珪)、「社会身分」(金盛祐)、「家族と親族」(權乃鉉)、「朝鮮

後期の民衆運動」(裴亢燮)、「性理学と実学」(高英津)、「歴史学と歴史意識」(* 裴祐晟)、「両班文化と日常生活」(鄭演植)、「朝鮮の科学技術と西洋科学」(文重亮)

近代Ⅰ（開港期）：「近代社会性格論」(河元鎬)、「西欧列強の侵略と東アジア各国の開港」(崔徳寿)、「斥邪と開化」(権五榮)、「近代化運動の展開：甲申政変と甲午改革」(王賢鍾)、「農民たちの改革運動」(楊尙弦)、「大韓帝国の樹立と政治変動」(朱鎮五)、「啓蒙運動と義兵戦争」(李相燦)、「不平等条約体制と経済政策の推移」(* 金泰雄)、「商工業の変化と農業の変動」(柳承烈)、「新文物の導入と社会変動」(全遇容)、「意識と学問、教育の変化」(具姬眞)

近代Ⅱ（植民地時期）：「韓国近代と植民地近代性論」(鄭在貞)、「日帝の韓国併合と植民統治」(権泰億)、「日帝の強制動員と民族離散」(鄭泰憲)、「植民地資本主義化と民族・階層間の両極化」(* 鄭然泰)、「植民地近代の学術と教育」(李智媛)、「近代文明の拡散と大衆文化の出現」(張圭植)、「基層民衆の生活と農民・労働運動」(李潤甲)、「社会教育環境と女性運動、学生運動」(李松姫)、「近代移行期農村社会の変動と地方有力者層の政治・社会活動」(池秀傑)、「民族主義理念と運動」(朴贊勝)、「社会主義理念と運動」(全明赫)、「抗日戦線統一と民族解放運動」(廉仁鎬)

現代：「世界化時代韓国の民族問題と民族主義」(都珍淳)、「米ソの分割占領と朝鮮半島冷戦構造の形成」(鄭容郁)、「解放後政治・社会葛藤と民族分断」(金聖甫)、「韓国戦争」(鄭秉峻)、「分断と戦争期の国家と市民、大衆生活」(金榮美)、「戦後韓国社会と4・19」(李ヒョンジン)、「朴正熙政府時期の韓国社会」(朴泰均)、「開発独裁時期韓国の社会と文化」(許殷)、「民主化運動と市民・民衆運動」(丁海龜)、「戦後北韓社会の変遷」(金光雲)、「南北関係の変化と統一政策」(* 洪錫律)

1990年代以降韓国の韓国史(朝鮮史)研究は、韓国社会の民主化による研究の自由化を受けて、質・量とも飛躍的に発展したと同時に、研究テーマや研究に通底する問題意識も以前と比較にならないほど多様化した。こうした膨大な研究成果を整理し、研究動向を把握する上で、本書はタイトル通りに格好の手引きになるだろう。



許英蘭 著

『日帝時代の場市研究 五日市の変動と地域住民』（歴史批評社、2009年）

허영란 『일제시기 장시 연구 -5 일장의 변동과 지역주민』 역사비평사, 2009

韓国には、東大門市場や京東市場のようにソウルでよく見られるような常設市場ではない、5日ごとに開かれる「場市」（定期市）が現在でも全国的に散在する。「場市」の商人たちはだいたい郡単位で郡内にある主だった都市を5日周期で巡回し、地域の商人や農民とともに地域住民を相手に農産物や食品、生活雑貨などを販売する。これが本書タイトルにある「五日市」であるが、その歴史は実に古い。朝鮮では、15世紀後半に登場した「場市」が商品経済の発達とともに持続的に発展し、18世紀には「五日市」として定着した。開港期には「場市」は開港地を拠点とする外国商人の攻略対象にされたが、植民地化以後も数的に増え続けた。1940年代（戦時期末期）には統制経済下でほとんどが停止したものの、南（大韓民国）では解放（独立）後は数年で以前の水準まで回復し、その増加のピークは1970年代であったと言う。

ヨーロッパでは近代化過程ですでに消滅し、日本でも戦後徐々に衰退していった定期市がこれほど広範かつ長期的に存続している例は、東アジアでは韓国だけだと言う。植民地期には植民地資本主義の末端機構に包摂されることで消滅するだろう、と言われていた通説とは逆に、朝鮮ではむしろ増加し、さらに現在にいたるまで脈々と地域住民の生活市場として生き続けている「場市」。この「場市」の長期存続と拡散を、歴史的にどのように解釈できるのだろうか？本書はこのような問題設定から出発し、植民地期の朝鮮の「場市」のあり方とその歴史的意義を社会史的に分析しようとした意欲作だ。目次は、次の通り。

序論

第一章 場市研究の意味

第二章 研究方法と資料

第一部 国家と場市

第一章 韓末の場市と日帝の市場調査

1. 地方場市の運営実態
2. 日帝の市場調査

第二章 場市数の増減と場市網の整備

1. 場市数の増減と質的変動
2. 場市網の調整と拡充

第三章 朝鮮総督府の場市政策

1. 場市に対する法律的・行政的統制
2. 場市の政策的活用と統制

第二部 場市変動と地域社会

第四章 場市変動の様相と要因

1. 場市の変動様相
2. 交通・運輸体型の変化と場市

第三部 場市葛藤と「市民」

第五章 場市をめぐる葛藤と市民

1. 場市葛藤の様相
2. 場市葛藤の展開過程

第六章 地域発展の追求と市民の参与

1. 場市と地域発展
2. 市民の参与と管理

第七章 場市と農家経済

1. 「ネットワーク市場」としての場市と農民生活
2. 農家収支と場市

第八章 朝鮮総督府の場市活用と農民の選択

1. 総督府の農業・農民政策と場市
2. 場市をめぐる抵抗と妥協

結論

本書の著者が「場市」分析において最もこだわったのは、経済史ではなく社会史（生活史、民衆史）の観点から、「場市」の変動を担った主体的要因として「地域住民」に徹底的に着目するという点である。筆者によると、従来の「場市」研究は主に経済史の分野で行われたが、そのほとんどは「場市」を単に市場制度としてのみ把握するあまり、植民地期の「場市」の発達は「奇形的な現象」「植民地的歪曲現象」とみなされ、またはその意義が過小評価されてきた。しかし、植民地期の「場市」は、朝鮮総督府が憲兵・警察などの公権力や植民地法制によって一定の統制・抑制を加えようとしたにもかかわらず、40年代に至る30年間で平均47%も増加した。その中心は、農村の生活市場である「場市」に最も直接的に利害関係を持った、場市圏内部に住む地域住民であったのである。

そのため筆者は「場市」を、朝鮮人の日常生活と社会的ネットワークの場としての複合的な局面を持つ、朝鮮人たちの混成的な社会関係として把握する。このような視角から見ると「場市」は、各地の朝鮮人たちが生活の現場で具体的な社会的要求を表出させる実践の媒介として、また「柔軟かつ包括的なコミュニケーションの体系」として再設定される。筆者の言う「地域住民」は行商人や農民だけでなく、階級、階層、職業、性別を問わない多様な朝鮮人（「市民」）を含んでいる。筆者は、「場市」をめぐる多様な葛藤の事例の分析を通じて、具体的事例ごとにこれらの「地域住民」の「場市」をめぐる集合行為に関わる主体を実証し、彼らが介入する具体的な事案、彼らを選択した実践方式、これらを通じて見えてくる「地域住民」たちの共有価値や論理、植民地当局との衝突時点、現実的な問題解決の方法と仮定を明らかにし、植民地下における生活の主体としての朝鮮人像を描き出そうとしている。

朝鮮植民地研究において、植民地期を見る視角として「支配と抵抗」という二項対立的な枠組みから

の脱却が提起されて久しい。しかし植民地下での朝鮮人たちの多様かつ重層的な営為は、当時の歴史的課題が独立国民国家建設であったがゆえに究極的にこのどちらかに分類されるか、あるいはそうした植民地的状況とはあたかも切り離されたかのような「非政治的なもの」として扱われるという、別の意味での二極分化の傾向があるのは否めない。生活史的な分析方法を用いた研究の多くが、ややもすると後者になりがちであるのに対し、「場市」をめぐる地域住民たちの実践を「生活」の重要な要素として植民地権力との拮抗関係の中で実証的に描き出した筆者の試みは、抑圧と抵抗だけでなく、朝鮮人の生活的営為を含めた植民地期歴史像への一つの接近方法を示してくれている。